

## 第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

河川は人間の経験を豊かにする空間である。人間は、本質的に身体的存在であることによつて、空間的経験を積むことができる。このような経験を積む空間を「身体空間」と呼ぼう。河川という空間は、「流れ」を経験できる身体空間である。

河川の体験は、流れる水と水のさまざまな様態の体験である。と同時に、身体的移動のなかでの風景体験である。河川の整備と河川を活かした都市の再構築ということであれば、流れる水の知覚とそこを移動する身体に出現する風景の多様な経験を可能にするような整備が必要だということである。

河川整備の意味は、河川の整備が同時に、河川に沿う道の整備でもあるという点に関わっている。場合によつて、道は、水面に近いことも、あるいは水面よりもずいぶん高くなっていることもある。どちらにしても、ひとは歩道を歩きながら、川を体験し、また川の背景となつている都市の風景を体験し、そしてまた、そこを歩く自己の体験を意識する。

河川の体験とは、河川空間での自己の身体意識である。風景とはじつはそれぞれの身体に出現する空間の表情にほかならないからである。風景の意味はひとそれぞれによつて異なっている。河川の空間が豊かな空間であるということは、何か豊かに造られているから豊かだ、ということではない。とりわけて何もつくられていなくても、たとえば、ただ川に沿つて道があり、川辺には草が生えていて、水鳥が遊び、魚がハ<sup>a</sup>ねる、ということであっても、そのような風景の知覚がひとそれぞれに多様な経験を与える。体験の多様性の可能性が空間の豊かさである。

豊かさの内容が固定化された概念によつて捉え<sup>とら</sup>えられると、その概念によつて空間の再編が行われる。たとえば「親水護岸」は水に親しむという行為を可能にするように再編された空間であるから、空間を豊かにすることであるように思われるが、その空間は

「水辺に下りる」「水辺を歩く」というコンセプトを実現する空間にすぎない。そこでひとは、たしかに水辺に下りること、水辺を歩くことはできるが、それ以外のことをする可能性は排除されてしまう。この排除は川という本来自然のものが概念という人工のものによって置換されるということの意味している。それは本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態と捉えることができる。

たとえば、流れに沿って歩いていくと、河川整備の区間によってそれを整備した事業者の違いによって、景観がちぐはぐになっていることがある。もちろんこれは同じ風景が連続していることがよいということではない。問題なのは、土を中心につくられている上流の景観が下流にいくに従って、大きな石によって組み立てられているような場合である。これは、川の相を無視し、事業主体の概念が流れる川を分けし、その分けされた川のダンペン<sup>b</sup>を概念化した結果である。

川は、流れ来る未知なる過去と流れ去る未知なる未来とを結ぶ現在の風景である。この風景を完全に既知の概念によって管理すること、コントロールすることは、川の本質に逆らうことになる。「河川の空間デザイン」という言い方には、危ういところが感じられるが、それは川のもつ未知なるものを完全に人間の概念的思考によってコントロールしうるもの、すべきものという発想が隠れているからである。

完全にコントロールされた概念空間に対して、河川の空間にもとめられているのは、新しい体験が生まれ、新しい発想が生まれ出るような創造的な空間である。川は見えない空間から流れてきて、再び見えない空間へと流れ去る。だから川は人生に喩え<sup>た</sup>られる。人生は、概念で完全にコントロールできるようなものではない。川が完全にコントロールされた存在であるならば、川の風景に出会うひとには、そのコントロールされた概念に出会うだけであろう。そうすると、川は、訪れた人びとそれぞれの創造性とは無縁のものとなってしまう。

都市空間は、設計から施工、竣工<sup>しゅん</sup>のプロセスで完成する。建造物が空間をセッティングして、そこで人びとの生活と活動が行われる。空間の創造は、その生活と活動の空間の創造である。人びとの活動の起点は建造物の建築の終点であるが、都市計画そのものは竣工の時点が終点である。しかし、河川空間の事情は異なっている。竣工の時点が河川空間の完成時ではない。むしろ河川

工事の竣工は、河川の空間が育つ起点となる。それは庭園に類似している。樹木の植栽は、庭の完成ではなく、育成の起点だからである。

だから、河川を活かした都市の再構築というとき、時間意識が必要である。川は長い時間をかけて育つもの、自然の力によって育つものであり、人間はその手助けをすべきものである。自然の力と人間の手助けによって川に個性が生まれる。時間をかけて育てた空間だけが、その川の川らしさ、つまり、個性をもつことができる。

河川の空間は、時間の経過とともに履歴を積み上げていく。その履歴が空間に意味を与えるのである。では、この時間にもとづく意味付与は、概念的コントロールによる意味付与とどこが異なるのだろうか。概念的コントロールによる意味付与は、河川空間の設計者の頭のなかにある空間意味づけであり、河川とはこういうものであるべきだ、という強制力をもつ。そのような概念によつてつくられた空間に接するとき、風景はヨクアツ的なものになってしまう。風景に接したひとが自由な想像力のもとでそれぞれの個性的な経験を積み、固有の履歴を積み上げることがソガイしてしまう。

流れる水が過去から流れてきて、未来へと流れ去るように、河川の空間は、本来、時間を意識させる空間として存在する。つまり川の空間は、独特の空間の履歴をもつ。履歴は概念のコントロールとは違って、一握りの人間の頭脳のなかに存在するものではない。多くの人びとの経験の蓄積を含み、さらに自然の営みをも含む。こうして積み上げられた空間の履歴が、その空間に住み、またそこを訪れるそれぞれのひとが固有の履歴を構築する基盤となる。

人間はいま目の前に広がる風景だけを見ているのではない。たとえば、わたしは昔の清流を知っているのに、いまの川の水の色を見れば、どれほど空間が貧しくなったかを想像することができる。その人の経験の積み重ね、つまり、そのひとの履歴と空間に蓄積された空間の履歴との交差こそが風景を構築するのである。一人ひとりが自分の履歴をベースに河川空間に赴き、風景を知覚する。だからその風景は人びとに共有される空間の風景であるとともに、そのひと固有の風景でもある。風景こそ自己と世界、自己と他者が出会う場である。空間再編の設計は、ひとにぎりの人びとの概念の押しつけであってはならない。

(桑子敏雄『風景のなかの環境哲学』)

設  
問

- (一) 「身体的移動のなかでの風景体験」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。
- (二) 「本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
- (三) 「それは庭園に類似している」(傍線部ウ)とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。
- (四) 「河川の空間は、時間の経過とともに履歴を積み上げていく」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (五) 「風景こそ自己と世界、自己と他者が出会う場である」(傍線部オ)とはどういうことか、本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。(句読点も一字として数える。)
- (六) 傍線部 a、b、c、d のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。
- a ハ(ねる)      b ダンペン      c ヨクアツ      d ソガイ

## 第二 問

次の文章は『十訓抄』第六「忠直を存すべき事」の序文の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

孔子のたまへることあり、「<sup>ア</sup>ひとへに君に随したがひ奉る、忠にあらず。ひとへに親に随ふ、孝にあらず。あらずべき時あらずひ、随ふべき時随ふ、これを忠とす、これを孝とす」。

しかれば、主君にてもあれ、父母、親類にてもあれ、知音、朋友にてもあれ、悪しからむことをば、必ずいさむべきと思へども、<sup>イ</sup>世の末にこのことかなはず。人の習ひにて、思ひ立ちぬることをいさむるは、心づきなくて、言ひあはする人の、心にならぬやうにもおぼゆれば、天道はあはれとも思おぼすらめども、主人の悪しきことをいさむるものは、顧かみを蒙かうむること、ありがたし。さて、することの悪しきさまにもなりて、しづかに思ひ出づる時は、<sup>エ</sup>その人のよく言ひつるものをと思ひあはすれども、また心の引くかたにつきて、思ひたることのある時は、むつかしく、またいさめむすらむとて、<sup>オ</sup>このことを聞かせじと思ふなり。これはいみじく愚かなることなれども、みな人の習ひなれば、腹黒からず、また心づきなからぬほどにはからふべきなり。

すべて、人の腹立ちたる時、強こほく制すればいよいよ怒る。さかりなる火に少水をかけむは、その益なかるべし。しかれば、<sup>カ</sup>機嫌をはばかつて、やはらかにいさむべし。君もし愚かなりとも、賢臣あひ助けば、その国乱るべからず。親もしおごれりとも、孝子つつしんで随はば、その家全くあるべし。重き物なれども、船に乗せつれば、沈まざるがごとし。上下はかはれども、ほどほどにつけて、<sup>キ</sup>頼めらむ人のためには、ゆめゆめうしろめたなく、腹黒き心のあるまじきなり。陰かげにては、また冥みやう加を思ふべきゆるな

〔注〕 ○冥加——神仏が人知れず加護を与えること。

設  
問

- (一) 傍線部ア・ウ・カを現代語訳せよ。
- (二) 「世の末にこのことかなはず」(傍線部イ)を「このこと」の内容がよくわかるように現代語訳せよ。
- (三) 「その人のよく言ひつるもの」と思ひあはずれども」(傍線部エ)を、内容がよくわかるように言葉を補って現代語訳せよ。
- (四) 「このことを聞かせじと思ふなり」(傍線部オ)とあるが、それはなぜか、説明せよ。
- (五) 「頼めらむ人のためには、ゆめゆめうしろめたなく、腹黒き心のあるまじきなり」(傍線部キ)とは、どういうことか説明せよ。

第三問

次の詩は白居易の七言古詩である。これを読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

放<sup>ツ</sup>旅<sup>雁</sup><sub>一</sub>

元和十年冬<sup>ノ</sup>作

九江十年冬大雪<sup>フ</sup>

江水<sup>ハ</sup>生<sup>ジ</sup>氷<sup>ヲ</sup>樹<sup>ハ</sup>枝<sup>ハ</sup>折<sup>ル</sup>

百鳥<sup>ク</sup>無<sup>シ</sup>食<sup>テ</sup>東西<sup>ニ</sup>飛<sup>ビ</sup>

中<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>旅<sup>雁</sup><sub>一</sub>声<sup>ハ</sup>最<sup>モ</sup>飢<sup>エ</sup><sub>タリ</sub>

a 中<sup>ニ</sup>啄<sup>ツ</sup>草<sup>ヲ</sup>  
b 上<sup>ニ</sup>宿<sup>リ</sup>

翅<sup>ハ</sup>冷<sup>エ</sup>騰<sup>レ</sup>空<sup>ニ</sup>飛<sup>ク</sup>動<sup>ス</sup><sub>ル</sub>遲<sup>シ</sup>

江童<sup>シ</sup>持<sup>シ</sup>網<sup>ヲ</sup>捕<sup>ト</sup>將<sup>モ</sup>去<sup>リ</sup>

手携<sup>シ</sup>入<sup>レ</sup>市<sup>ニ</sup>生<sup>ク</sup>売<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>

我<sup>ハ</sup>本<sup>モ</sup>北<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>今<sup>ハ</sup>譴<sup>ケン</sup>謫<sup>タク</sup><sub>セラル</sub>

人<sup>ト</sup>鳥<sup>ト</sup>雖<sup>モ</sup>殊<sup>ナ</sup><sub>ルト</sub>同<sup>ジ</sup>是<sup>レ</sup>客<sup>ナ</sup><sub>リ</sub>

見<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>客<sup>ヲ</sup>鳥<sup>ヲ</sup>傷<sup>マ</sup><sub>シム</sub>客<sup>ニ</sup>人<sup>ヲ</sup>

e 贖<sup>ア</sup><sub>ガナヒ</sub>汝<sup>ヲ</sup>放<sup>チ</sup><sub>テ</sub>汝<sup>ヲ</sup>飛<sup>ビ</sup>入<sup>ラ</sup><sub>シム</sub>雲<sup>ニ</sup>

雁<sup>ヨ</sup>雁<sup>ヨ</sup>汝<sup>ハ</sup>飛<sup>ビ</sup>向<sup>カ</sup><sub>フ</sub>何<sup>ニ</sup>処<sup>ニ</sup>

第一<sup>ニ</sup>莫<sup>カ</sup><sub>レ</sub>飛<sup>ビ</sup>西<sup>ニ</sup>北<sup>ニ</sup>去<sup>ル</sup><sub>コト</sub>

健	官	淮
兒 <sup>ハ</sup>	軍 <sup>ト</sup>	西 <sup>ニ</sup>
飢	賊	有 <sup>リ</sup>
餓 <sup>シテ</sup>	軍 <sup>ト</sup>	賊
射 <sup>テ</sup>	相 <sup>ヒ</sup>	討 <sup>ツモ</sup>
汝 <sup>ヲ</sup>	守 <sup>リテ</sup>	未 <sup>ダ</sup>
喫 <sup>くらヒ</sup>	老 <sup>つかレ</sup>	平 <sup>ラカナラ</sup>
拔 <sup>キテ</sup>	食	百
汝 <sup>ヲ</sup>	尽 <sup>キ</sup>	万 <sup>ヲ</sup>
翅 <sup>シ</sup>	兵	甲
翎 <sup>れいヲ</sup>	窮 <sup>マリテ</sup>	兵
為 <sup>サン</sup>	将 <sup>ニ</sup>	久 <sup>シク</sup>
箭 <sup>せん</sup>	及 <sup>バン</sup>	屯 <sup>とん</sup>
羽 <sup>ト</sup>	汝 <sup>ニ</sup>	聚 <sup>しゅス</sup>

〔注〕

○元和十年——西曆八一五年。この年、白居易は江州司馬の職に左遷された。

○九江——江州のこと。今の江西省九江市。

○江童——川べりの土地に住む子ども。

○譴謫——罪をとがめて左遷すること。

○第一——禁止の意を強める語。決して。

○淮西——今の河南省南部。淮河の上流域。

○賊——国家に反逆する者。

○兵窮——兵器が底をつくこと。

○健兒——兵士。

○箭羽——矢につける羽。



設問

- (一) 空欄 a と空欄 b にあてはまる文字を、第一句から第四句の中から選んで記せ。なお「a 中啄草 b 上宿」の句は、「花有清香」月有陰」の句のように、前四字と後三字が対応関係にある。
- (二) 「生売之(傍線部 c)を、「之」が指すものを明らかにして、平易な現代語に訳せ。
- (三) 「同是客(傍線部 d)とは作者のどのような心情を表しているか、わかりやすく説明せよ。
- (四) 「贖汝放汝飛入雲(傍線部 e)とはどういうことか、簡潔に説明せよ。
- (五) 「将及汝(傍線部 f)とはどういうことか、具体的に説明せよ。

## 第四問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

石狩アイヌの豊川重雄エカシ(長老)の自宅脇にある素朴な作業小屋のなかは、燃える薪のなつかしい匂いがした。あたりには、エカシが彫ったばかりの儀礼具の見事なマキリ(小刀)の柄やイナウ(御幣)が無造作に置かれ、それらに使われたクルミやヤナギ材の香りが淡く漂っている。

立派な顎髭のエカシは火のそばに座り、鋭い眼光に裏打ちされた人懐っこい微笑をうかべながら、おもむろに、壮年のころの熊狩りの話をはじめていた。アイヌの聖獣である熊とのあいだに猟師が打ち立てる、繊細な意識と肉体の消息をめぐる豊かな関係性の物語である。エカシにとつての熊は、幼少の頃から、コタン(聚落)の外部にひろがる「山」という異世界をつかさどる神々異人として、人間が人間を超えるものとのあいだに創りあげる物質的・精神的交渉、すなわち「普遍経済」と呼ぶべき統合的なコミュニケーションの世界を、凝縮して示す存在だった。その驚くべき話のなかでも私がとりわけ興味を惹かれたのは、エカシが「無鉄砲」という日本語をたびたび援用しながら語る、丸腰での熊狩りの冒険譚だった。

古くは弓矢、近代になれば鉄砲を武器として山に入り、アイヌはヒグマを狩った。いうまでもなく、アイヌ(人間)とカムイ(熊)との関係は捕食者と獲物という一方的な搾取関係ではなく、互酬性の観念にもとづく純粋に贈与経済的な民俗信仰のなかにあった。そこでは熊の肉体とは神の地上での化身であり、毛皮や肉を人間へと贈り届けるために神はヒグマの姿をとって人間の前に姿をあらわすのだった。熊狩りによって人間はその贈与をありがたく戴き、感謝と返礼の儀礼として熊神に歌や踊りを捧げること、熊の魂を天上界へとふたたび送りかえすことができると考えられていた。そして熊をめぐるこうした信仰と丁重な儀礼の継続こそが、熊の人間界への継続的な来訪を保証するための、アイヌの日常生活の基盤でもあった。

豊川エカシもまた、こうしたアイヌの熊狩りの伝統に深く連なり、また自ら石狩アイヌの長老として、すなわちもつとも徳ある狩人の一人として、神の化身たる熊と山のなかで対峙<sup>たいじ</sup>してきた。炉端の話のなかで、アイヌの熊獲<sup>と</sup>りたちの潜在的な意識のどこかに、武器無しで熊と闘い、これを仕留めるといふ深い欲望が隠されていたことをエカシは私に示唆した。現にエカシ自身が、意図的に鉄砲を持たずに山へ入ることがままあったというのである。その場合でも、熊との遭遇をことさら避けたわけではない。むしろどこかに、遭遇への強い期待があつた。鉄砲を持つことで自らの生身の身体を人工的に武装し、そのことによつて狩るものと狩られるもの、すなわち猟師と獲物という一方的な関係に組み込まれることを潔しとしない、すなわち搾取的関係から離脱して、熊にたいして自律的な対称性と相互浸透の間柄に立とうとする無意識の衝動を、私はエカシの口ぶりから感じとつて、ひどく興味をそそられた。

そのとき、エカシはさかんに「無鉄砲」ということばを使うのだった。あの日、山に入ったときは「無鉄砲」だったから、いつもより心のなかが騒いでいた……。 「無鉄砲」のときだから、とりわけ丹念に熊の足跡を探り、土や草についた獣の匂いをかぎ分け、不意に熊のテリトリーに踏み込まないよう注意した……。 「無鉄砲」の熊狩りが報われて、熊と諸手で格闘して仕留めたこともある……。 山を「無鉄砲」に歩くことほど、深く豊かな体験はない……。

こうした奔放な語り口に惹き込まれつつ、私<sup>ア</sup>のなかに奇妙な違和感が湧いてくる。丸腰で熊の棲<sup>す</sup>む山に入ることにはきわめて危険なことであり、すなわち「無鉄砲」であることは、まさに字義通り、後先を考えない「向こう見ず」で「強引」な行為であるはずだった。ところがエカシの使う「無鉄砲」ということばを、そうした「無謀」さという意味論のなかで理解しようとしても、不思議な齟齬<sup>そご</sup>感が残るのだった。いやむしろ、エカシは「無鉄砲」なる語彙を、「きわめて慎重」で「繊細な感覚」という正反対の意味で使用しているのだ、とわかったとき、私の理解のなかにあらたな光が射し込んできた。「無鉄砲」という和人の言葉をあえて借用しながら、熊と人間のあいだに横たわる「鉄砲」という武器の決定的な異物性を、エカシはパロディックに示唆していた。しかも、鉄砲を放棄することで、アイヌの猟師がいかに繊細な身体感覚を通じて熊の野生のリアリティにより深く近づいてゆくかを、エカシの物語は繰り返し語ろうとしていた。「無鉄砲」であることは、必然的に、人間の意識と身体を、裸のまま圧倒的な野生のなかにひとおもい

に解放し、異種間に成立しうる前言語的・直覚的な関係性に自らを開いてゆくための、いわば究極の儀式であった。無鉄砲とはすなわち、人間が野生にたいして持ちうる、もつとも繊細で純粹な感情と思维の統合状態を意味していたのである。

「無鉄砲」という日本語表現は、それじたいは「無点法」ないし「無手法」(方法無しに、手法を持たずに)という用語の音変化とされる一種の当て字である。だがこの用語は、近代日本文学の聖典ともいべき夏目漱石の『坊ちゃん』冒頭のあまりにも良く知られた「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」という一節によって、その意味論を封鎖されてきた。豊川エカシは、近代文学の正統によるこの語彙の意味論の固定化の歴史など素知らぬふりをしながら、見事に、「無鉄砲」なる語彙にかかわる私の言語的先入観を粉碎した。そのうえで、武器を持たない熊狩りの繊細な昂揚感を、エカシは転意された「無鉄砲」という言葉の濫用によって私に刺激的に示したのである。個人の意思や行動の持つ強引さ、無謀さの印象はたちまち消え、北海道の山野のなかに身体ごと浸透してゆく集団としての人間たちの慎重で謙虚で強靱な意識の風景が、私の脳裡に立ち現れてきた。鉄砲を持つとつが持つまいが、アイヌたちが熊と対峙するときつねに参入しているにちがいない、<sup>エ</sup>象徴的な交感と互酬的な関係性の地平が、奥山にかかる霧の彼方から少しずつ近づいてくるようだった。

(今福龍太「風聞の身体」)

設  
問

- (一) 「私のなかに奇妙な違和感が湧いてくる」(傍線部ア)とあるが、どういふことか、説明せよ。
- (二) 「熊と人間のあいだに横たわる「鉄砲」という武器の決定的な異物性」(傍線部イ)とあるが、どういふことか、説明せよ。
- (三) 「その意味論を封鎖されてきた」(傍線部ウ)とあるが、どういふことか、説明せよ。
- (四) 「象徴的な交感と互酬的な関係性の地平」(傍線部エ)とあるが、どういふことか、説明せよ。